長野市中央道路改良工事の完成

長野縣報告主任

緒言

長野市中央道路と云ふ部分は國道十號線中、石堂町南區、安茂里長野停車場縣道の分岐點から大門町の北區、善光寺仁天門に至る迄の間を云ひ『中央道路』の名稱は此所を改修する事になつてから始めて唱へ出され、其以前は全く此名稱を知られなかつた。單に大通りと云ひ若くは此沿道に連なる石堂、新田、後町、大門の各町名を呼んで、市民は沿道一帶を繁華の中心地と見做して來た。

名刹善光寺を中心にして之から扇子を開いたやうに漸次發展した跡を辿つて長野市を一つの身體に例へるならば、中央道路は、正に其脊髓で、四方から群がる參詣客を對手に最初善光寺本堂附近へ築かれた市街が、段々其脊丈を延ばして永年の間に何時とも知れず、今の繁華なる市街を形作つたもので、從つて其發展の有樣は極めて不規則に、街路は狹苦しく、舊後町や嶋の寮附近は、車が二臺並行して通れず、少し雜沓する場合は人々は全く身動きさへも自由に出來なかつた。後年此道路の改修に依つて發見された事だが、當時善光寺本堂へ至る此邊一帶の丘地へ、後の考へもなく無雜作に市街を築いた證據には、後町から新田あたりを掘返すと、其中から道路に使用した大石が不規則に掘出されたり、坂のやうな所があつたりして、雜然たる古への跡を止めてゐた。

何十萬と云ふ信者が集ひ、市街の狹さに永い間苦まねばならなかつた沿道では、例へどの位でも好いから若し擴まるものならば町幅を擴めたいものと、口々には改修の切なるを唱へながらも、見渡す限り櫛比する市街を切取つて道路を擴めるなどゝ云ふ事は、到底人間の微力を以てしては能はない夢のやうに、大仕掛な仕事の前に、唯々ひれ伏さねばならなかつた。

たまゝ沿道の有力者等が相會して道路を切り擴めねばな

ちない事を話し合つたのが動機で、例へ直ぐは實現されなくとも將來と云ふ意味から、大正八年十月十六日、國道改修實行委員二十名が擧つて之が長野市役所に時の市長牧野元氏を訪ひ、改修促進方の陳情をしたのが原流となつて、此大計畫は、愈々產み出されんとする根强い力を以で、其胎內へ孕んだのである。

八間道路提案

之に基いて市當局からは、改修すべき幅員の希望を各町へ申出させた處が

石堂町南區は　幅員四十八尺
同　町北區は　六間　人道と車道との區別を附す
新田町は　四十八尺　現道路を中心として西側へ擴む
間御所町は　八間　西側に取擴む

の各々希望を提出したので、爾來理事者の手許に於て、改修計畫を立て研究調査中にあつたが、同十一年五月二十三日に至つて、愈々此改修案が市會へ提案さるゝに至つた。提出議案は、

石堂町より大門町に至る
改修延長八百三間四分　幅員八間（車道廿九尺歩道兩側九尺五寸）
此工費金八拾九萬五千參百四拾圓也

內譯	市負擔
金四拾四萬七千六百七拾圓	縣費補助申請額
金四拾四萬七千六百七拾圓	

右の案を市會は全會一致で可決すると同時に縣へは大正十一年度から向ふ十ケ年間に半額の補助を出願した、然し其頃は未だ半ば空想に何れもは遠い彼岸に置かれてゐた事は事實である、と其處へ實行委員等は期成同盟會なるものを組織して、沿道の一般關係者をして必ず實行させるやうに努めるから是非共實現を期したいとの熱心な陳情書の出るもあつて此間尠なからぬ努力を續けた結果、それならば實地に査定して見てはと云ふので、時の知事岡田忠彥氏は、縣技師の工藤米治岩根近太郎兩氏を派遣して、實地に當つて見ると、當時の市の希望たる八間幅は一時都合よく思はるゝも、やがては狹く、且つ他日電車を敷設する場合にも物足らない時が來るので、犧牲を拂ふならば一層此上二間を加へて、十間幅としてはとの話が出て、此所に俄かに十間幅道路に更正する事となつた。

十間道路に變更

同年十一月一日再び市會へ更正議案が提出され、先の八間道路八十八萬餘圓は、一躍十間幅、百三十五萬三千八百八十七圓の膨大なる豫算となり、此半額六十七萬六千九百四十三圓五十錢の縣費補助を得て十一年度より向ふ三ヶ年間に施行する事とし更正の補助願を縣當局へ提出した。此三箇年間の改修年度割に依ると、

大正十一年度は

工費四拾貳萬五千八百參拾參圓六拾壹錢八厘で、石堂町の起點から新田町下八幡川迄の二百五十五間を作り

大正十二年度は

工費四拾八萬五千六百九拾八圓拾參錢六厘で、新田町下八幡川より相生町角迄の二百八十七間を作り

大正十三年度は

工費四拾四萬貳千參百五拾四圓五拾參錢九厘を支出して、相生町角から終點迄の二百六十一間四分を改修す

の大綱領を立て、着々として其準備を整へて行つた。

縣費の補助

由來道路の改修には地許寄附の外に、半額を、其他の補助に俟つを大體の目標とし、市の中央道路も之に準じて、半額の縣費補助を出願したのであるが、何にせよ總工費百三十五萬餘圓に對する半額であるから、此莫大な補助を、北信の一廓へ投ずべく縣會が認めるか否かは頗る疑問とされ、殊に選を南信よりする縣會議員の如きは、必らずや其處に快く贊意を表さぬものと觀て、いたく心配されたものだが、縣當局の誠意と、市選出の縣會議員等が、其間に在つて亦よく斡旋の勞を惜まなかつた努力に依つて、縣當局からは縣會へ提案され、危ぶまれた縣會も如何やら無事通過して、大正十年十二月二十八日附を以て、時の內務部長から金六十七萬五千圓の補助を、十箇年卽ち內譯は

大正十一年度	金貳萬圓	同	十二年度	金七萬五千圓
同 十三年金	金七萬五千圓	同	十四年度	金七萬五千圓
同 十五年度	金七萬五千圓	同	十六年度	金七萬五千圓
同 十七年度	金七萬五千圓	同	十八年度	金七萬五千圓
同 十九年度	金七萬五千圓	同	二十年度	金五萬五千圓

に割當て之を交附支出する旨の通知狀が屆いて、兎にも角にも此大金額の補助を聞き屆けられた事を、市理事者は勿論、關係者一同は安堵の胸を撫で下した、謂はゞ之に依つて、大

事業の緒は先づ開かれた次第である、と其處へ又、縣の工區から査定設計書が到着して、實地工事に着手し得らるゝやう、諸準備を取計らへとの事になつて、長野市は此處に盆と暮れが一時に押し寄せたやうな、忙はしさの中へ投ぜらるゝに至つた、此査定設計書の内譯も、後年の參考に資するため記錄に止めると

總工費百三十五萬圓を

道路費	金貳拾萬九千圓
支障物移轉料	金六拾五萬圓
潰地買收代	金四拾八萬貳千五百圓
街路樹植栽費	金五百圓
監督諸費	金八千圓

としてそれ〴〵見積られてゐる。

此處に於てか市は、早速市會を開いて改修費繼續年期及び支出方法案を立て、卽ち大正十一年度には四十四萬四千三百十五圓、同十二年度には五十一萬五千九百五十一圓、同十三年度には五十萬八千百三十七圓の繼續支出を決定し、市債六十八萬圓を同時に三箇年に分割して借入ることも決定を見た。

起債認可

諸般の膳立てが整ふと共に、直ぐ後から必要に迫るゝは先づ金の問題で、此處に起債案が愈々持出され、縣費補助金は十箇年間に貰ふ事となつた結果、それまでの金融をはかるべく、日本勸業銀行其他から、金六十八萬圓の起債借入議案が、十一年二月二十二日市會へ提案されて、利子は年八分、據置期間は大正十四年三月迄とし、償還方法は十四年度より、廿八年迄の十五箇年賦を以てする事に決定して、直ちに内務大藏兩大臣の認可を受くべく出願した、當時、財政緊縮方針に伴ひ、市町村の起債は成るべくせないやうに主務省の監督頗る綿密を極めたので、市の起債認可申請も容易に聽かれず、理事者は其間絕えず上京しては、内務省と大藏省の間を驅け廻つて、殆んど居催促を試み、其諒解を求めた結果事情止むを得ないものとして、起債額六十八萬圓を六十五萬七千圓に更正して十一年十一月九日水野内相と市來藏相の名を以て、首尾よく許可になつて來た。

工事着手

愈々工事を實施する時が來た。之より先長野市長は國道を

改修するに當つては道路管理者でないので、道路法第二十四條に依り管理者たる長野縣知事の承認を求め、知事は又之を差支ないとして來たので十一年四月から實地測量に着手し製圖の出來上ると共に幾回かの委員會を開いて、道路の縱斷勾配を、今迄の十七分の一の處は總て二十分の一より急な勾配とせず、橋梁は出來るだけ高め、地盤の切下げや盛土は、出來るだけ縮少して沿道の家屋改築に對する便宜をはかり、橫斷勾配は三十分の一、四十分の一、五十分の一の三種類に區分して、之亦沿道土地所有者の犧牲程度を考慮斟酌して施す事となり、猶道路の築造については、築造定規を定め其維持保存上に又、美觀の上からも相當考慮して置かねばならぬので、豫め先進都府の現狀を調査參照する必要から、吉田技師を名古屋、京都、大阪、神戸へ、伊藤技手を東京、橫濱へ派して實地調査を遂げた結果、幾つかの視察報告案の中から、

歩車道境界に階段を設けず電柱又は植樹を以て區劃す（複線軌道を敷設するも差支なし）

車道敷を四十尺、歩道二十尺（片側十尺づゝ此中に排水溝渠、電柱植樹を含む）

の一案を最も中央道路の事情に適當なものとして、委員會に諮問し、其協贊を得て市會協議會で認め、愈々實施設計に依つて工程變更を行ひ、茲に工事を請負に附し得る迄の段取りとなつた。

請負の諸準備

此請負についても、相當大工事を誰が落札するかは、一般市民の注目の的となつてゐたが、十二年三月三十日市會に於て、工事施行年期參箇年分を一括して競爭入札に附するを適當と認め、其速成を期するには、家屋切取の終つた部分から、道路築造に取りかゝり、甲地から乙地へ、盛土の經濟をはかる事も、施行上無意味な勞力を省き得て、便宜を受ける事尠くないので、一度に入札し併せて歩道の鋪裝工事を施し、之に要する一切の經費は沿道各戸に於て、それ〴〵負擔する事にまとまつた。

競爭入札會

大正八年十月改修企畫の端を發して以來、實に足掛五ケ年の星霜を閲して、大正十二年五月七日愈々此大事業工事は、市理事者並に改修委員等立會の許に競爭入札會を開いた。入札者は本縣下及び東京市、東京府、新潟縣、福井市等より集る者二十名に達し、開票の結果は東京府島崎福松氏九萬八千

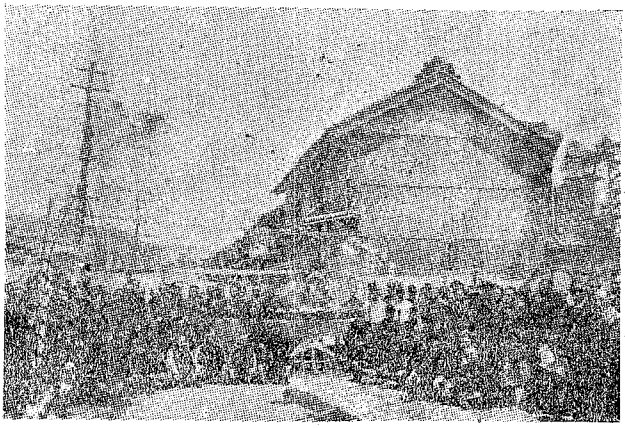
八百圓で落札人に決定した、併も之が最高價格入札者との値の開きは、十萬五千二百圓と云ふ非常な相違で、島崎氏の此思ひ切つた安入札は、集る程の同業者をして一驚を喫せしめた。之は中央道路改修中特に記憶すべき一事で、斯くして同月十一日工事契約を締結するに及んで工區別の請負は左の如く決定した。

工區別	豫定價格	契約金額	差引減額
第一工區ノ一	二六、七〇二圓	一七、二〇〇圓	九、七〇二圓
第一工區ノ二	一九、八七九	一三、九〇〇	五、九七九
第二工區ノ一	一八、二三四	一二、八〇〇	五、四三四
第二工區ノ二	三二、〇三五	三二、〇〇〇	九、四三五
第三工區	一〇、〇三九	三二、〇〇〇	一七、七四九
合計	一四七、二二四	九八、八〇〇	四八、三二四

起工式擧行

大事業の鍬初め、嚴肅なるべき起工式は若葉そよぐ、十二月五年十七日の吉日をトして、石堂町の起點に於て擧行した。此日集まる者市會正副議長以下議員、中央道路改修委員、分掌委員、區長、改修部員市長以下各市吏員、新聞記者、縣土木課長、長野工區主幹等八十餘名

陽春の光りうらゝかに、式は午前十時から始まり降神行事、祓詞、大麻行事、鹽湯行事、献饌、齊主祝詞、鍬初行事、齊主祭主玉串捧上、市會議長、道路技師、改修委員、分掌委員、區長、各總代、請負者順次禮拜、撤饌、昇神行事の諸儀式あつて、つゝがなく終り、それより一同は冷酒を酌んで前途幾多曲折多い工事の幸先を祈つた。



中央道路起工式

工事施行計畫

此工事は起點から終點迄路線を大體一直線とし、終點に於て見通せば廣々した路面と家屋は一眸の許に起點までを望み得られ、試みに夜の情景に至つては、全く申分ないやうにするを理想としたが、然し沿道家屋

の犧牲を成るべく平均させるために、今迄の道路中心と、改修道路の中心とを接近させる必要から、どうしても理想通りの一直線には行かず、又水道、瓦斯、電話線などの地下埋設物の移轉費を豫算に計上してないので、將來に於て此移轉に要する位置を保存するの必要と、且つ電車軌道敷設の場合にも支障ないやう考慮した次第で、猶道路の兩側には側溝を設け、歩車道の境には筋石を据えて此間を區分し店舗と歩道との間へは花崗石を敷いて民地との區別を附け、側溝上は鐵筋コンクリートの蓋へ、長さ十尺毎に鐵格子をはめて雨水などの流れ込むに便利な仕組とした。

路面築造工事

路面築造工事に於ては、工事用セメントは改修部から請負人に交付し、又諸材料運搬の爲め、砂利運搬荷物自動車一噸半積一輛を内外興業會社より七千百圓で買ひ入れ、工事中請負人に貸し、コンクリート混和機二臺を購入して同樣請負人に貸し渡し其後本年三月中更にフォード一噸積貨物自動車を吉田技師外委員等上京して山田商會より二輛買入れる等、斯くして土工機械の揃ふのを俟つて先づ既定の測標に基いて左側右側中央の三部分に分けて道路を掘下げ、土砂は適當な場所へ搬出して、輾壓機の輾壓作業を持つて、車道上には直徑五六寸の栗石を平均厚さ六寸の高さに敷き詰め、其上部には三寸以下の礫石を矢張六寸厚みに敷き、更に其上部は割屑石や山砂利の小さいものを二寸厚みに置いて、歩道兩側の止め石布設の終るを俟つて、最上層は篩砂利を二回若しくは三回程に厚さ三寸に敷き、輾壓機作業に依つて路面を平らに潰ぶし、以つて理想的な路面としたが、此工事に際し、礫石栗石は、犀川丹波島附近第三工區に使用の向は、市郊外鄕路山から、砂利は裾花川採取場から自動車で運搬した。

歩道鋪裝工事

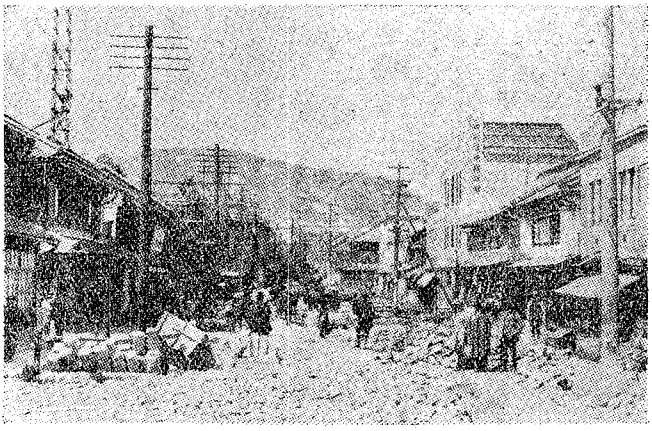
此基礎工事は、設計書に依つて兩側止め石を堀割り、混凝土下敷に礫を敷き搗き固め、幅六寸厚さ四寸の混凝土詰を堅くし、厚さ六分のモルタルを流し止め石を据付けたもので、此上へ施すべき鋪裝工事は、當初計畫外の仕事で、尤も初めから鋪裝工事の必要なのは認めてゐたが、然し限りある豫算の範圍内では、同時に施行する事の困難なのと、且つ全線を通じて五萬圓の鋪裝費を要する故に、基礎工事に要する約二萬五千圓の「コンクリート」分を、本費用から支辨する事として、改修の斯かる好機會は容易に得られないので、沿道の發

奮を促し他都市の實例等も參酌して、施行を專ら勸誘した結果、各町は町毎に鋪裝材料を選擇して擧つて施す事となり、全く今迄とは面目一新の步道を現出する樣になつた、町別鋪裝材料及工費は二萬二千餘圓を費して下の如くである。

町別	工事種類	工費精算額
石堂町南區	混凝土板	一、八三一、〇〇〇錢
同町北區	同	二、五四二、三八
新田町	同	二、三四七、三八
間御所町	同	二、七五四、八八
西後町	鐵煉瓦	三、四六六、一七
東後町及櫨堂町	混凝土板	一、六八二、七五
大門町南區	花崗石板	五、〇四〇、〇〇
大門町北區	鐵煉瓦	二、四三〇、〇三
計		二二、〇九四、五九

震災と諸材料

コンクリート工事に使用のセメント」は、全部市が買入れて工事に給したが、買入先淺野セメント會社の深川、川崎兩工場は大震災で全滅して、豫定の納期に實行不能となつたので、應急方法を講じ高價ではあつたが三重セメント百樽を市内から購入して置いて、一方淺野セメント會社に對しては吉田技師上京打合せをして從前の値段を支持させ、北海道及び九州工場の製造になる物を納めさせた外、震災後一時は鐵道の輸送力に一大支障を來して思ふやうに荷が屆かぬので、丸山市長は鐵道省並に運輸事務所に陳情して、辛うじて供給を受けた程である。



工事中の中央道路

街路樹の植栽

大正十二年七月二回に亙つて街路樹植栽を協議し樹種は『プラタナス』邦名を鈴掛と云ふを選擇の上、植栽個所は步道と車道の境界へ三間距離を保つて、總樹數四百七十七本を植えつく、苗木は名古屋から取寄せたが、僅かにして大きくなるのと、此樹の性狀頗る野趣に富んでる

るのとで、街路樹としては各地共に珍重されてゐる。

家屋切取狀況

道路工事に着手するに先立つて、家屋其他の支障物移轉は工區別に移轉期限を協定して、必ずそれを履行させる事として、改修委員分掌委員等はそれ〴〵分擔區域を定め、各關係方面を歷訪して極力督勵に努めたが、移轉を要する總家屋數は二百八十二戸で、之等に對して市では移轉料六十萬圓を豫算に計上支出したが、沿道家屋が實際に費した負擔額は、豫算の三倍百八十萬圓と稱せられ、斯くて其移轉狀況は大正十二年三月末現在に於ては、移轉完了六十戸、未施行二百二十戸を算へ、逐次進むに及んで六月十日第一工區移轉期限迄には第二工區に屬する分迄も、急激に捗どつて同月末には總戸數の過半數に漕ぎ付け、完了百三十七戸を數へ、其後逐月十數戸乃至二十數戸宛進行して、第二工區切取期限に至つては未施行僅か九十戸を殘すのみの好成績を示すに至つた、然し十一月以降冬期間は其割合に捗取らず遲々としてゐたが、翌大正十三年融雪期を俟つて俄に活氣を呈し、折柄善光寺開帳の執行となつたにも拘らず、進んで四月末には未施行六十四戸、五月末は愈々少く三十七戸を殘すのみとなり、第三工區移轉期限の六月十日迄には、全部の完了を告ぐべく見られたが、偶々大門町通り旅館は、參詣客で混雜を極め着手に手間取れ、爲めに同月末に尙ほ五戸の未了を殘し、七月廿一日に及んで長野郵便局舍のみ、獨り不體裁の建物を街路に突出す以外、他は悉く綺麗に片附いて終つた。

道路の新五橋

中央道路全線を通じて改修すべき橋梁は、石堂橋其他合計五橋で、架設する川は何れも用水堰として、古くから樣々な慣例の許に、此架替へに當つては總て關係水利組合の承認を求めねばならない事となつてゐるので、此の度も幾度か組合と折衝した結果、五月及び十月の春秋二期に分けて都合の好い期を劃り停水して、一面には交通上の便宜も考へつゝ、左側若しくは右側の片半分づゝを施して來たもので、橋材は全部鐵筋コンクリートを以てし、橋上はアスファルトで固め、堅牢を旨とする一方、體裁にも注意して、高欄の如きは頗る美術的に斯くして出來上つた五橋は、夏の夜の涼み場所などには申分ない迄に面目を改めた。

之より先橋を改めると共に、之に附する橋名を如何にするかとは、改修委員は勿論、町の古老などにも相當に研究論議

されたが、結局は町の意志を尊重する事となつて、各關係町に協議し、決定したのが末廣橋、石童橋、蓬萊橋、鶴賀橋、初音橋である。

末廣橋＝之は中央道路の起點に架かり、末廣と云ふ語の緣喜を尊重して以前の儘の名を用ひ、

石童橋＝舊石童橋と記したのを訂正したもので、石童丸の古事並に由緒を永遠に殘すため特に橋名に附して傳へ、

蓬萊橋＝橋の附近を島の寮と云ひ、今迄は下八幡川橋と稱してゐたもので、蓬萊と改めたのは、祝壽の語に發し聞くからに緣喜よく、

鶴賀橋＝舊上幡川橋の改稱で、同地は大字鶴賀の地區に屬し鶴賀八幡なる歷史的地名を永く保存するのと、一面蓬萊橋と相俟つて鶴龜の喜びをあしらつたもの、

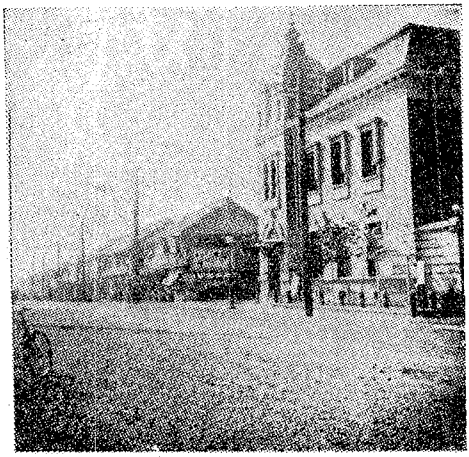
初音橋＝舊鐘鑄川橋で、何時の世にかけい橋と云はれたのが訛つてけいり橋と呼ばれ、此橋を渡る花嫁は必らず不吉なけいりなる語のために、不緣となると傳へられ、今に花嫁は此橋を通らないで他を廻る迷信を除くためから、町の人々はいろ〳〵に究研した揚句、初音橋と改めたもので、鐘鑄川の起りは善光寺の梵鐘を此ほとりで鑄たと云ふ事に端を發し然すれば定めし初音の鐘を撞いたに違ひなく、餘韻は遠く川中島平野へ嫋々として響き渡り、誠や崇嚴其ものゝやうな心持ちを創造した語で、

斯くして相當な謂はれの許に、豐かな創造を以て新五橋の名は永しへに袂の高欄を飾る事となつた。

請負人奬勵金と竣工期間繰上

工區別の請負金額決定と同時に、全工事は最初大正十四年三月三十一日を以て竣工する契約となつてゐた、然るに第一、第二各工區分工事は契約期限より實際は速成されたが、第三工區へ行つて家屋移轉が豫期に反し遲れた爲め改修部は、貨物自動車二臺を購入して請負人に貸し、大馬力を掛けて大正十三年十二月末日迄に竣工させやうと計劃し、請負人も又契約期限を斯く繰上げ、萬善の力を致したが、圖らずも大震災のために傷手を蒙り、事業に頓挫を來すの止むなきに陷つて到底期限内に終る事の出來なくなつたのと、尙ほ混凝土工事は四十度以下の低温では完全を期し難いので、冬期を控へて中止し翌年廻しにするのも心許なく、併も沿道家屋は歲末を控へて、最も書入れ時の年の市を工事中の崇りで不況に終る

やうでは、延いて全市の經濟上にも波及するを慮り、市は一萬五千圓の奬勵金を支出して、十一月中に竣工短縮をはかるべく計畫して市會へ發案した、處が豫期に反して市會は議論沸騰愼重審議の結果、十月廿一日結局金額を一萬圓に修正して支出するやうに決し、十一月末日迄に竣工した場合は、奬勵金を交付する旨を請負人に示して請書を徵する事となつたが、果せる哉其影響は、顯著なる作業振を發揮して、晝夜兼行大に活氣〃呈して三ケ年繼續の大事業も、大正十三年十一月二十五日玆に全く竣工を見る事となつた。



竣功せる中央道路

六十九銀行より起點を望む

街路照明燈

中央道路を照す街路照明燈については、沿道は勿論改修部當局も、道路の出來上る前から既に研究怠らず、東京電氣株式會社とも幾度か折衝した處、他都市には餘りに類の尠くない、二百燭電燈を點じてはとの話が出て、早速沿道有志者を集めて協議を重ねた結果、大奮發を以て之を施す事になり、工費に一基百五十圓づゝを投じて、路面より十二尺乃至は十五尺の高さを取り、其距離も十二間に一基の割合として總計百三

竣功せる中央道路

後町より善光寺遠望

十九基を、道路兩側の歩車道境界に立つる事となつたが、之に要した工費並に將來の點火は、全部沿道に於て寄附した次第で、試みに改修道路夜の光景に至つては、明るさ晝を欺くばかり、終點たる仁天門附近に立つて遠く起點を望めば、兩側の點燈は煌々として長蛇のうねるが如く、今迄とは全く趣きを異にし、其面影をすら窺へない程の美觀を呈するに至つた。十間幅の道路は或は他都市に珍らしくないかも知れぬ、然し東京銀座通りでさへ、五十燭の照明燈に對して正に四倍の二百燭の點燈を施し、併も之が停車場に近い起點より、一直線に善光寺へ達する。天與の地形は恐らくは先づ全國稀に觀る處で、此の加き街路照明燈の完成は、確かに他へ誇るに足るを疑はない。

電柱移轉

改修費豫算には、電柱移轉費は全然計上されず、壺定額にも包含してなかつたが、それは道路の改修に伴ひ、當然建設關係官署が移轉すべきものであるとの見地からで、十一年十一月中縣參事會並に縣土木課長からは、電柱移轉を行はねば改修工事の竣工とは認められずとの意見を持つて、市へ移轉方注意を促して來たので、委員會は電燈會社及び遞信省に向つて交渉を開始し、電燈會社に對しては無償にて一切の取拂ひを、遞信省へは郵便局舍の移轉費金五千四百七十五圓餘を拂ふから、電信電話線路と郵便ポストの移轉は無償で取計らひを申請した、然るに交渉の結果會社は應諾し、併も費用總べてを投ずるの雅量を示して、電柱全部を鐵筋混凝土に改めたが、遞信省は其後數回市長助役上京折衝を試みた處、大正十二年度施工區分(郵便局以南)の電柱移轉は、概算金一萬二千二百九十五圓を要する見込みだから、其半額は市で支出せしよと要求して來た、其所で十二年八月市會協議會へ附議した結果、要求額六千六百餘圓を支出し、一日も早く取除けるやう通牒すると、名古屋遞信局は正式の書面を以て認可し、併せて物品購入材料運搬人夫等は、一切局の方へ工事を委托されたいと希望を囑して來たので、市は之を諒とし、其秋から第一工區分の移轉に取掛り、全線總數五十六本中、郵便局以南の三十四本を移轉し、更に第三工區分の殘りを改修委員會に諮り、移轉費四千餘圓を支出するに決してゐたが、出來得る限り支出を少くする方針で、省及び名古屋遞信局と折衝を重ねた處、古材を使用して二千九百二十八圓を以て移轉を取計ふに決し、工事一切を完了する事となつた。

工事總計（精算額）

種別	員數	單位稱	摘要
改修道長	八〇五、〇	間	
堀鑿土立坪	九六四、〇	坪	
盛土立坪	九二六、〇	同	
車道部面積	五二五八、〇	同	
歩道部面積	一六〇〇、〇	同	
橋梁面積	一一〇〇、〇	同	
側溝延長	一、五〇二〇	間	
暗渠延長	六五、〇	同	
開渠延長	四〇、〇	同	
中澤水路改築	七五、〇	同	
踏切縣道及市道	二一、〇	線路	
寺院護岸工事	七、〇	坪	
寺院階段工事	二九、〇	間	
民家下水排工事	二四七、〇	ヶ所	
歩道鋪裝工事	一五九四、〇	間	
棧道工事	一、〇	ヶ所	
上水道補修工事	二四三、〇	同	
街路樹植栽工事	四七七、〇	本	
橋梁照明燈	一〇、〇	基	
電話柱移轉	五六、〇	本	
假車庫其他建物	二、〇	棟	
家屋其他移轉	三八七〇、〇	坪	
潰地	四七八四、〇	同	

工事竣工祝賀式

改修工事完く成つた中央道路は、實施設計と比較對照した結果、九分九厘まで設計通りに終り、下水溝其他に於て幾分の差を見たので、之が設計變更を行ひ、過去三箇年を閲した大工事も此處に完備するに至つたので、祝意を表するため市は竣工式を擧ぐる事となり、十二月五日儀式を、終點たる仁天門前に於て擧行するに決し、祭事終了後は城山グラウンドに於て一大祝賀會を催ほし、八百名の招待員は此所に相會して竣工を壽ほぎ、沿道は一町をも殘さず、仁輪加物及底抜屋臺を出して景況を添え、其他各町は全市的餘興に煙火打揚を寄附する事として、長野名物惠比壽講煙火にも劣らぬ賑やかな計畫の下に、當日は、起點終點並に城山式場へ大アーチを設け、沿道町内は思ひ〳〵店頭を裝飾するなど終日は唯化粧美しい新嫁の姿にも、たとへまほしい新道路の光景を以て、此處に最後の幕を下す事となつた。